



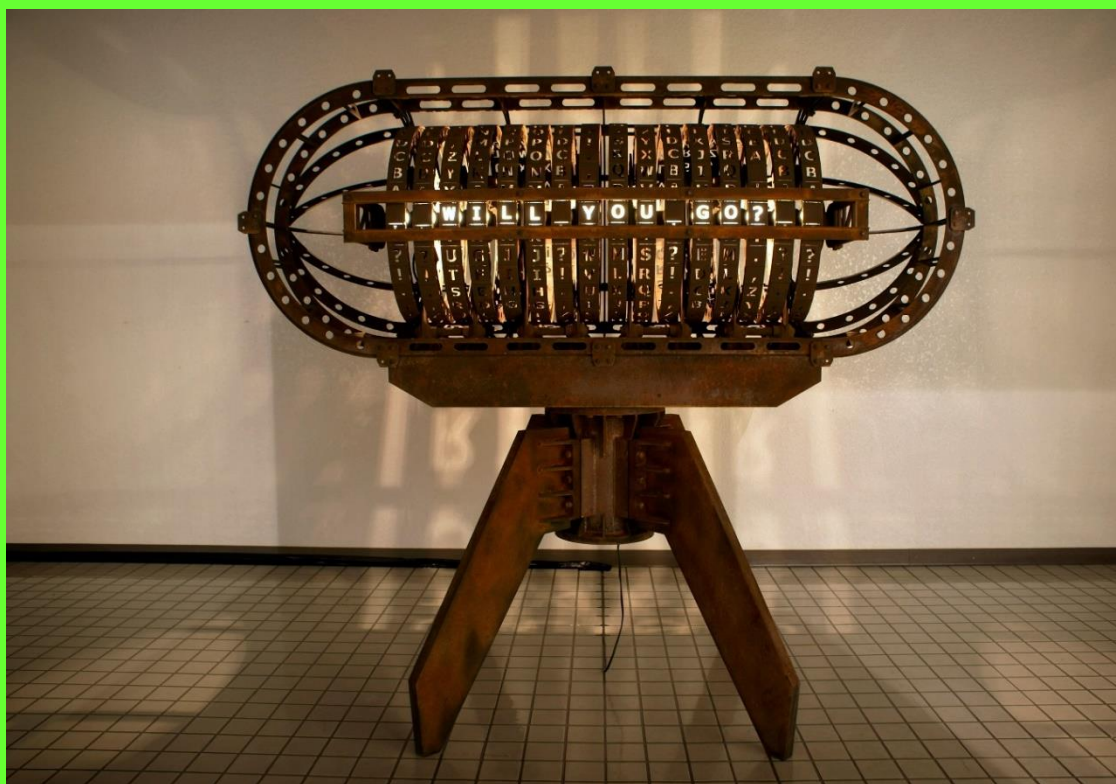
いづみ

No.79

街なかの美を守ろう

(題字 國松 明日香)

自作自選 49



《DIALOG MACHINE 2》

熊谷 文秀

(2 ページに「作者の言葉」)

自作自選 49

作者の言葉

アルファベットが切り抜かれた 16 輪のリングが DC モーターによって回転し、停止位置を PC 制御することで様々なメッセージが表示されます。PC には 250 種類のメッセージが記憶されており、AI を駆使した最新機器のように会話を交わすことはできませんが、通りがかる人々に 16 文字のささやかなメッセージを大袈裟に届けます。

(1946 年生まれ。札幌市在住、道展会員)

タイトル：DIALOG MACHINE 2

制作年：2021 年

素材：MDF（赤さび塗装仕上げ）

PC、DC モーター、LED

サイズ：H180×W190×D100cm

設置場所：作者蔵

連載 宮の森の四季 49

本郷新記念札幌彫刻美術館

わたしとちょうこくのおはなし

業務係 大場 裕子

いよいよ 40 年以上もお世話になった美術館ともお別れです。

退職まであと半年も過ぎ去ったころ、ふと寂しさが心をよぎったのが彫刻との別れです。

わたしと作品の軌跡を Facebook に残そう。勤務前に写真を撮りためる贅沢なひとりの時間を満喫することとなりました。

先ずは、自称ですが分身同然の本館庭園に佇む「堰」。開館当初の新聞記事のため取材記者に姿形が似ているということでツーショットの相棒を頼まれ、大きめに掲載されたのが縁となります。彼女は厳寒の吹雪の日も、灼熱の太陽がふりそそぐ夏の日もいつもそこで、天を仰いでおります。

携帯電話のカメラで撮りますが、最新なので思いのほかきまります。モチーフもなかなか良い感じに迫ってきます。裸婦やわだつみ像とも一気に距離が縮まり一緒に写しました。頭像、裸婦、石膏像もつぎつぎと一番いい顔、仕草を知っているのは私といわんばかりです。そこで彫刻と対話するわたしのあたりまえの日常があったことに気づきます。そしていつも見守ってくれていたことを。

本郷新の凄さは生ける彫刻だと実感します。量のあるかたちには骨も肉もあり、祈りやオマージュもある。今この時だからこそみなさまの財産である作品にふれ、その原点であるヒューマニズムを感じていただきたいと願います。

*大場さんは 3 月末で彫刻美術館を退職されました。



彫刻の大きさと広さと、近さについて

大分大学教授 田中 修二

この原稿の依頼をいただいて、改めて2015年10月にシンポジウム「野外彫刻を創る・守る」で札幌を訪れたときのことを思い出している。そのとき、まちなかにある数多くの屋外彫刻作品を、橋本会長をはじめ友の会のみなさんに案内していただいた。

最も印象に残っているのは、そのスケールの大きさだ。大通公園の本郷新作《泉の像》の台座と周囲の花壇を含めた大きな空間性。高い台座に立つ黒田清隆やホーレス・ケプロンの像と背景の空までの奥行き。中島公園に設置された山内壮夫の《森の歌》の巨大な高さ。朝倉文夫による《木下成太郎像》での写実的な人物像をしっかりと支える石の台座の重厚な構築性。同じ公園の芝生に点在する白色セメントの作品群も、緑がまぶしい公園の広々とした空間とよく調和している。

それは私が暮らしている大分市の屋外彫刻とはまるで異なるスケール感だった。市街地中心部の遊歩公園とその周囲には1950年に設置された朝倉文夫の《瀧廉太郎君像》のほか、佐藤忠良による《聖フランシスコ・ザビエル像》など、主に戦国大名大友宗麟の時代の南蛮文化をモチーフにした作品が並ぶ。両側を交通量の多い二車線の車道に

はさまれた細長いその公園の空間は、札幌に比べるとだいぶこじんまりとして密集した印象だ。

このことは都市の規模のちがいでだけでなく、原野を開拓して生まれた札幌と城下町の町割がいまも残る大分という歴史にも由来するのだろう。屋外彫刻は土地の歴史が積み重なって生まれた周囲の空間と互いに作用し合いながら“成長”していくものだと思う。日頃のメンテナンス活動によって彫刻を守っていくことも、その“成長”をうながしていく。

スケールはちがっていても、札幌と大分の彫刻の間にはそれらの活動によって育まれた、人々と彫刻との近さという共通性を感じる。もちろん私自身が大分でのメンテナンス活動の当事者であるから、その近さを客観的に判断することはできない。けれどその活動を継続することが、その近さを多くの人たちに広げ、彫刻そのものも“成長”させる力になると信じている。

こうした取り組みが各地で芽生え、結びつき、ネットワークとして広がっていけば、私たちにとっての芸術文化のあり方をも変えていくのではないかとひそかに期待している。

北海道の野外彫刻をめぐる旅

会員 東山 早苗

私が道内の彫刻に興味を持つきっかけとなった作品は、本郷新の「無辜の民」である。たまたま Web サイトで見た台座の上のその人は、大きく背中を反り、手足を広げ、何かに縛られて動かないでいた。海のそば、人もいない草茂る丘、民家や街から切り離された寂しい場所にいる人。この作家が何を思いこの作品を作ったのかを知りたい。誰が、何の目的で、この彫刻をこの場所に設置したのかを知りたいと思った。

私は彫刻の芸術性や専門的なことはわからないが、この作品のたたずまいや、彫刻が切り取る石狩浜の風景が残像となり、道内に設置されている野外彫刻をめぐる旅を続けている。

彫刻は、駅や遊歩道、公共施設などの身近な所に設置されている。人物、記念碑、抽象的な造形物、壁面レリーフ、住宅街の一角にあるお地蔵さまも、ある意味、彫刻である。それを作品として鑑賞するよりも「目印」として認知している人は多いだろう。例えば札幌駅構内にある安田侃の「妙夢」がそうだ。「札幌駅の白いオブジェ」といえば、ほぼ迷うことなくたどり着けるこの彫刻は、札幌駅に欠かせないランドマークであり、札幌駅を行き交う人々に寄りそうように佇んでいる。

札幌は日常の中に野外彫刻が息づく街だと思う。彫刻家の手により何かが吹き込ま

れた人工物が、その空間に溶け込み、あるいは空間を支配し、街と人と共存している。札幌テレビ塔と「泉の像」を背景に記念撮影する観光客、にぎやかな子供の声が聞こえる「ブラック・スライド・マントラ」、とうきびワゴンの近くには石川啄木がいることもいつもの風景だ。公園そのものが彫刻であるモエレ沼公園は、広大な北海道という大地に刻まれ、根付き、石山緑地の造形作品は近隣住民のいつもの光景としてそばにある。

札幌のように、街と人と彫刻が自然な流れでつながり合う街は少ないのではないかと感じている。

野外彫刻は、地域の環境整備や文化発展への寄与、記念事業などを目的として設置されることが多い。恒久設置され、風景の一部となり、忘れられた存在となる作品が多いことも事実である。その中で札幌には、彫刻のある風景として印象に残り、長きにわたって温かいまなざしを注がれる作品が無数にある。他の地域と札幌を含む道内に設置された野外彫刻にはどこか違いがあるのだ。それは地域性か、環境や景観か、芸術を受け入れる感性か、彫刻をめぐる旅の中で探求していきたい。

ひがしやま・さなえ 1974 年、福岡県出身。東京都在住。2021 年 11 月、友の会入会。

旭川彫刻サポート隊 厳寒の中で彫刻清掃活動

旭川彫刻サポート隊会長 宮島 聡

私たちの旭川彫刻サポート隊は2002年に、野外彫刻が鳥の糞やほこりにより汚れているものを清掃し、きれいに保ち市民に楽しんでもらうために発足しました。今年は20周年です。現在は7グループ43人と学校や企業の団体会員の参加で市内76基の彫刻を守っています。

今年の旭川冬まつりは昨年に引き続き大雪像の制作がなくなりましたが、氷像や小型の雪像、雪だるまの制作が市民の間で続けられ、雪や氷に親しみました。

旭川彫刻サポート隊は冬季活動の一環として旭川市内の野外彫刻の点検、清掃や周囲の除排雪を行っています。私の所属する7班でも1月29日に行われました。当日は雪も降らず、寒いながらも日差しの中での作業となりました。私たち班員と道教育大旭川校の学生さんたちと先生に教育実習として参加していただきました。

今年の旭川の雪は例年に比べると半分くらいかなと思いました。いつもは大雪に埋もれ、そこに何があるのか分からないぐらいの9条緑道にある「櫓の記」(藤井忠行)から始めました。彫刻の上部に雪がちょこんと乗っているぐらいでしたが、作品にたどり着くまでには膝まで雪に埋まりました。台座の下まで雪を掘り下げ、作品のプレートが見えるようにしました。

次に向かったのが「隼の碑」(山内壮夫)と「石狩の夏」(善本秀作)で、買物公園とロータリーの間であり、除雪された固く重たい雪が周辺に積まれていました。ここも彫刻やプレートが周囲から見えるように除雪を行いました。

次いで噴水の彫刻「手」(木内礼智)、「鳥人譜」(一色邦彦)、「開拓のイメージ」(中井延也)で、これらは買物公園に設置されており、周囲の人たちによって除雪され、きれいな状態に保たれていました。

「鳥人譜」は数年前に作品が台座から離れていて、いつ落ちてもおかしくない状態になっていたことがありまし



厳寒の中、除雪作業する彫刻サポート隊

た。すぐに旭川彫刻美術館に連絡し、改修しました。

市民のオアシスである7条緑道には「婦人像着衣」(加藤顕清)をはじめとして7基の彫刻が設置されています。ここは初夏にはフジの花房が下がり、甘い香りが立ち込めます。暑い夏には木陰を提供し、クリスマスから冬まつりにかけてはイルミネーションがトンネル状に点灯し、通路に温かな雰囲気醸し出します。ここも周囲の雪を取り除きプレートまで見えるようにしておきました。

清掃、点検、除雪が終わった後は温かいお茶、コーヒーを飲みながら、先生から彫刻の見方や感じ方のお話を聞き、学生さんからは「今まで何気なく見ていたが、これからはじっくり見たい」などの感想を聞いて散会しました。

友の会ニュース

医療雑誌「ケア」
「野外彫刻美術マップ」連載終了
2020年4月～22年3月 全24回



北海道医療新聞社の月刊医療雑誌「ケア」に2020年4月号から連載した「北海道野外彫刻美術マップ」が22年3月号で終了した。

連載は道内14振興局単位で石狩管内石狩市の本郷新の開拓者慰霊碑《無事の民》をトップバッテリーに、最終回の十勝管内陸別町の小室吏《関寛斎翁之像》まで24回。各回に写真と会員の高橋淑子さんの解説、さらに近隣の彫刻所在地などを紹介した。

「野外彫刻美術マップ」シリーズは2018年4月から20年3月までの「さっぽろ野外彫刻美術マップ」を含め、4年間にわたる長期連載。さっぽろシリーズでは各回5点ほどの彫刻を紹介、札幌市内130点を取り上げた。

橋本信夫会長は「北海道編では彫刻所在地の市町村教委ほか地域住民からの協力を得た。

地域に埋もれた野外彫刻が掘り起こされ、脚光を浴びるなど大きな効果があった」と評価している。

ケア連載「さっぽろ編」冊子化 太陽財団への助成申請実らず

2018年から20年まで北海道医療新聞社の雑誌「ケア」に連載した「さっぽろ野外彫刻美術マップ」24回の刊行を目指した太陽財団の助成金申請は昨年12月末、同財団から不採用の通知が届いた。

申請は彫刻ガイドブック「ぶらり札幌彫刻めぐり」の制作費などとして80万円の助成を申請していた。冊子化計画は改めて対応を検討する方針。

デジタル彫刻美術館 収録作品数3800点に拡充

友の会が昨年4月、道内の野外彫刻を網羅した「北海道デジタル彫刻美術館」を立ち上げて1年。この間、新たに800点の彫刻データが会員をはじめ各地の彫刻ファンから寄せられるなど収録作品は3800点に達した。

中でも自らブログを立ち上げている今井康夫、梁井朗、太田朱美（サバ奈子）会員などから保有している写真、情報が提供されたほか旭川、北見、稚内、

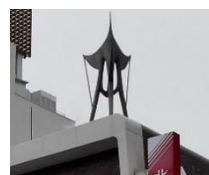
訓子府など各市町村からも友の会の協力要請に応じて写真などが提供された。

デジタル彫刻美術館の管理、運営にあたっている橋本信夫会長は「今後も野外彫刻のアピールや維持、保全を目指すボランティア団体との情報交換、連携を深め、全道を網羅した詳細な彫刻地図コンテンツの充実を図って行きたい」と話している。

山内壮夫の《鶴の舞》どこへ？ 守りたい市民の文化財

昨年夏、ビル解体で撤去された旧北陸銀行屋上にあった山内壮夫《鶴の舞》の移転先が宙に浮いている。

これまで友の会などが中心となって山内に



ゆかりの深い母校・札幌西高や北海道立近代美術館、札幌芸術の森などに打診したが、いずれも断られ、現在は建築業者の資材置き場でシートに包まれたまま。「これではせっかくの文化財が開発に伴い消えて行く」と関係者は気をもんでいる。

友の会新年会2022年も中止

2月27日に予定していた新年会はコロナ感染拡大で中止となった。中止は2年連続。

エクセルに親しもう

橋本会長を講師に勉強会

デジタル彫刻美術館データ管理

「北海道デジタル彫刻美術館」の開設に伴い、エクセルで作成されている彫刻データの扱い方を知ってもらおうと「データベース講習会」が1月20日、かでる27で開かれた。

橋本信夫会長を講師に作者名を中心にエクセルの「フィルタ機能の使い方などを学んだ。3月3日にも第2回の学習会をエルプラザで開いた。

2022 年度友の会総会

5月14日(土)13:30～
北大学術交流会館

(札幌市北区北11条西5丁目)

◇講演会 (14:30～)

「 」

講師 山田のぞみ氏

(札幌芸術の森美術館学芸員)

未定稿です

ご協力ありがとうございました 友の会活動資金寄付

78号後の寄付者

原子 修さん(小樽)

寄付金累計 13万5000円

友の会「つばやき」コーナー

コロナが終わったら

即マスクのない生活がしたい。しかし、それは現実のものとなるのだろうか。国内に限らず、海外どこへ行ってもリスクを伴う。高齢者は死ぬまでマスクは離せない。人とのつながりは大切と実感させられたが、密になることは避けねばならないということは相反すること。自己責任で、行動する以外に方法は無いということだろう。

細川 房子

コロナ禍でどこへも行けず、毎朝の公園散歩が唯一の外出。コロナが収まったら、大好きな美術館巡りで、絵画・彫刻が見たい。これまでルーブル美術館で「モナリザの微笑み」を見るという希望が叶えられ、オルセー美術館、オランジュリー美術館へも足を運び、モネの「睡蓮」も見られたことは感動でした。次回は足立美術館の「横山大観」を見たい。清水 恵美

コロナウイルスの世界的な感染拡大により、日常生活の根幹を揺るがすような事態になり、文化芸術どころでないという声もあります。しかし、こうした時代だからこそ、文化芸術を通して人の優しさや感動を共有することが大切ではないでしょうか。「明けない夜はない」を信じてコロナ収束願うばかりです。

近藤 泉

札幌からここ九州の唐津に来て1年余り。駅前には唐津焼で制作された曳山像赤獅子、街なかに溶け込むように「唐津くんち」を素材にした造形物。時を経た建築とそこかしこに潜んでいる造形に今まで目にしてきたものとの異なりにわくわくする毎日。ポストコロナの日々もその延長になりそうです。

鈴木 敏明

事務局日誌▼21年12月9日＝定例役員会(エルプラザ)22年新年会企画ほか▼27日＝会報「いずみ」78号発送(エルプラザ)▼22年1月13日＝定例役員会(エルプラザ)新年会企画、会報79号編集企画▼20日＝デジタル彫刻美術館データ学習会(かでの2・7)エクセル操作など▼26日＝「ケア」連載最終回出稿▼2月5日＝新年会開催中止決定(コロナ感染者急増のため)▼17日＝定例役員会(エルプラザ)会報編集企画など協議▼3月6日＝美術館連続講座(市民交流センター)開館40周年記念

編集後記▼今号の連載「宮の森の四季」の筆者は大場裕子さん。文末に記した通り3月末で彫刻美術館を卒業された。開館以来の職員で、友の会も長くお世話になった▼この欄は美術館の皆さんに交代で執筆をお願いし、2010年の31号から始まった。今号で49回。大場さんはこのうち9回に筆を執った。美術館事業への熱い思い、事務室から見える自然の移ろいなど、多忙な中、心のこもった原稿を届けていただいた。本当にありがとうございました。(大内)

札幌彫刻美術館友の会
会報「いずみ」 No.79
 2022年4月1日発行
 発行人 橋本 信夫
 編集者 大内 和
 (札幌市清田区清田5-4-6-30
 011-884-6025)
 印刷 山藤三陽印刷

会報「いずみ」79号 目次

自作自選49《DIALOG MACHINE 2》	熊谷文秀	・・・	表紙
宮の森の四季49「わたしとちょうこくのおはなし」	大場裕子	・・・	2
風見鶏「彫刻の大きさと広さと、近さについて」	田中修二	・・・	3
寄稿「北海道の野外彫刻をめぐる旅」	東山早苗	・・・	4
寄稿「旭川彫刻サポート隊の清掃活動」	宮島 聡	・・・	5
友の会ニュース		・・・	6-7
ケア連載終了／連載冊子化助成金申請不採択／デジタル彫美収録作品拡充 ／「鶴の舞」どこへ？／エクセル学習会／新年会中止／活動資金寄付者 事務局日誌、目次、美術館行事予定ほか			
			8

本郷新記念札幌彫刻美術館行事予定

本 館

■はじめてのほんごうしん

開催中～5月31日^火

没後40年、開館40年を経た今だからこそ、改めて本郷新の現代的意義づけを行い、人々の認識を高める工夫を施し、趣向を凝らした展覧会を打ち出す。

記念館

■本郷新・全部展④

100の石膏像

開催中～5月31日^火

美術館所蔵の石膏像364点のうち、野外設置のための4m級の大型の彫像から細やかな造形美に触れられる小像に至るまで100点を厳選して紹介。ブロンズ像の鑄造工程にあって重要な役目を果たしながらもあまり語られることのない石膏原型像の魅力に迫る。

本郷新記念札幌彫刻美術館

札幌市中央区宮の森4条12丁目 ☎011-642-5709

友の会ホームページ公開中です！ご覧ください

<https://sapporo-chokoku.jp>